The Temple における自己言及的抒情詩

—— George Herbert の詩論再考 ——

畠　山　悦　郎

I

What trophee then shall I most fit devize,
　in which I may record the memory
　of my love's conquest, peerelesse beautie's prise,
　adorn'd with honour, love, and chastity ?
Even this verse vowd to eternity
　shall be thereof immortall moniment ;
　and tell her prayse to all posterity,
　that may admire such world's rare wonderment :
....　　（Edmund Spenser, *Amoretti*, 69, 5-12）[1]

ヨーロッパ文学の長い伝統の中に水脈のように流れる幾つかの主題を掘り起こし，その姿を明らかにしてくれたのが，E. R. Curtius であった。彼が明らかにした水脈の一つに「詩による（名声の）永遠化のトポス（"the immortality-topos"［477］）」（以下「永遠化のトポス」と略）がある。上に引用したのがその典型例で，文字通り，詩を捧げる相手の栄誉や美貌を書き記すことで，その者の名声の永続を図った詩のことである。大切なの

は，この場合，当該の詩が（可能な限り）永遠に残存することが条件となる。そこで，詩は（名声を刻印した）「記念碑」の類に擬されることが多い（cf. “moniment [= momunent]” [10]）。このことと併せ，もう一点，この比喩を成立させるべく，当の詩自体に対する「自己言及」が生じることを確認しておく必要がある（cf. “this verse” [9]）。このトポスにとってこの自己言及の構造は必然であり，また極めて重要でもある。なぜなら，このトポスの，たぶん最も大切な意義は，名声の永遠化を可能にする詩（という芸術）の価値，さらに言えば，その詩をものする詩人の力量（＝創造性）への自負心を（暗に）代弁している点にあるからである（Curtius 477）。

こうした「永遠化のトポス」は，Curtius が指摘するように（476-77），その水源を辿れば古代ギリシャにまで行き着くのだが，とりわけルネサンス期に太い流れを形成しているように思える。イギリスについて言えば，最初の大きな湧出は 16 世紀後半から 17 世紀にかけて見られたと言ってよいであろう。とりわけ，1590 年代から爆発的に溢れ出したソネット連作の中に，このトポスが数多く発見される。[2] その背景には，「印刷・出版業組合」（“the Stationers’ Company”）の設立をはじめとした幾つかの社会・文化的要因があったと考えられるが，[3] 今回の小論の目的は，そうした要因（との関係）を探ることではなく，このトポスと一人の詩人の抒情詩集との関係を考えてみることにある。詩人は George Herbert。そして彼がその短い生涯で唯一残した文学的テクストといってよい *The Temple*，が具体的な分析対象である。この詩集の中には数多くの自己言及的な詩が残されている。おそらく，それは，この詩人が「詩のありよう」に対し，いかに真摯に向き合ったかということを物語ってもいるはずである。今回は，そうしたテクストの中で，特に当該のトポスと関係が深いと考えられるもの

を取り上げ，このトポスに対する彼のスタンスを検討してみたい。

具体的には，次章において，「永遠化のトポス」との関係が色濃いと思われる自己言及の構造をもつテクスト数編が取り上げられ，特に，当該トポスとのアナロジーを中心とした分析がなされる。第 III 章では，宗教詩である Herbert のテクストと，世俗詩で用いられることが圧倒的に多いこのトポスとの，むしろ，差異に注意が向けられ，Herbert のスタンスが検討される。そうしたプロセスの中で，彼の詩論（ひいては信仰観）が援用され，再考されることになる。[4] この詩人の「詩作」に対する考え方は独特であり，それが当該トポスに対する彼のスタンスにも深く関わっていると考えられるからである。

II

三部構成から成る *The Temple* のうち，有名な抒情詩群を収める中心部に当たるのが *The Church* である。そして，その *The Church* の冒頭を飾るのが “The Altar” である。

A broken ALTAR, Lord, thy servant rears,
Made of a heart, and cemented with tears :
Whose parts are as thy hand did frame ;
No workman's tool hath touched the same.
A HEART alone
Is such a stone,
As nothing but
Thy pow'r doth cut.
Wherefore each part
Of my hard heart
Meets in this frame,
To praise thy name.
That if I chance to hold my peace,
These stones to praise thee may not cease.
O let thy blessed SACRIFICE be mine,
And sanctifie this ALTAR to be thine.

標題の「祭壇」をこの詩（の物理的かたち）自体が具現する，いわゆる「形象詩」の部類に入る。この祭壇は語り手の「こころ（“heart”）」を表象している（2）。そして，それは，神が語り手をして神自らを讃美することができるよう造りたもうたものだという（5-12）。[5] とりわけ注意したいのが，最終部の語り手の祈りである。「たとえ（自分が）黙したとしても，これらの石（＝祭壇）が神を称えることを止めないように」，と彼は逆説的に語る（13-14）。つまり，キリスト（という犠牲［“Sacrifice”］）が語り手に与えられることにより，この祭壇（＝語り手のこころ）が浄められ，（よ

り一層）神のものとなる（15-16），ということなのだが，[6] ここでの逆説をよりよく理解するためには，「人間のこころ＝神の宮」という聖書中の譬え（1 Cor. 3 : 16 ; II Cor. 6 : 16）を思い起こす必要がある。この祭壇は，繰り返すが，語り手のこころを表す。その「こころ」が発する（神への）讃美は，神自身がそこに宿ることによって正しく讃美たらしめられる（あるいはその讃美自体を「語らせられる」），ということであろう。

ところで，上述のように，この詩は自ら「祭壇」のかたちを採ることによって，この詩の中で語られる「祭壇」の理想的なありようを体現したものと言える。すなわち，この詩はこの詩自らに言及することで（cf. “this Altar”［16］），まさに神への永遠の讃歌たり得ているのである。捧げる相手こそ「神」に代わっているとはいえ，自らの詩への自己言及と詩自体の（ある種の記念碑の類の）建造物への類比，そしてそれによる讃歌の永続への祈り，これらは，あの「永遠化のトポス」を想起させはしないだろうか。なるほど，このトポスは世俗詩に一般的なものではあったが，Herbert と同時代の多くの作家が愛用し，流行したのは事実である。宗教詩人であったとはいえ，Herbert がその影響を受けただろうことは充分に想像できる。後に検討することになるが，少なくともこの詩人が当時の職業詩人を中心とした世俗作家を意識し，（自らの意に反することだったにせよ）なにがしかその感化を受けた痕跡は彼の幾つかの詩に残されている。

こうした観点に立って，もう一つ，別のテクストを参照したい。“Sion” という詩である。この詩では，まず，神の住処として，きらびやかなソロモンの神殿と罪にまみれた人間（語り手）の「こころ」が対比される。神はわざわざ後者を選ぶのだが，まず最初に，そこに巣食い，敵対する罪と戦い，それを浄化する必要があった。そのプロセスの中で「こころ」は（戦いの激しさのため）苦悶の声をあげることになるが，その声こそ実は神へ

の真の讃歌たりうるのだ，と結ばれる。

There thou art struggling with a peevish heart,
Which sometimes crosseth thee, thou sometimes it :
The fight is hard on either part.
Great God doth fight, he doth submit.
All Solomons sea of brasse and world of stone
Is not so deare to thee as one good grone.

And truly brasse and stones are heavie things,
Tombes for the dead, not temples fit for thee :
But grones are quick, and full of wings,
And all their motions upward be ;
And ever as they mount, like larks they sing ;
The note is sad, yet musick for a King.（13-24）

最後の二連は，「苦悶の声（“grone（s）”［18, 21］）こそ真の讃歌」のパラドクスが，巧みな比喩で，はっきりと表明されている。問題は，“The Altar” と同じように，この詩でもまた人間のこころが神の神殿に譬えられていること，そして，そのこころの発する悲しげな声，はからずも「神への讃歌（“musick for a King”）［24］」へと転ずるその声こそ，この詩それ自体に相違ない，ということである。Mark Taylor は，この詩の最終行が Herbert の詩論を暗示している可能性を指摘しているが（48），まさにこの箇所の “musick for a King” はあるべき姿の「詩」の謂であろうし，言わずもがな，この詩自体を指してもいるはずである。音楽と詩の類比は説明

するまでもないが，Herbert も多用している。[7] とりわけ，“Sion” と同じように，こころの発する「苦悶の声」が神への真実の讃歌だとする逆説をテーマとし，かつその讃歌として当該の詩に自己言及しているテクストとして，“Deniall” を援用したい。

When my devotions could not pierce
Thy silent eares ;
Then was my heart broken, as was my verse ;
My breast was full of fears
And disorder : （1-5）

冒頭 5 行で，語り手のこころの発する声が詩（および音楽）に類比され，神と疎遠な苦しみの状況が綴られているのが分かる。

O that thou shouldst give dust a tongue
To crie to thee,
And then not heare it crying ! all day long
My heart was in my knee,
But no hearing.

Therefore my soul lay out of sight,
Untun'd, unstrung :
My feeble spirit, unable to look right,
Like a nipt blossome, hung
Discontented.

O cheer and tune my heartlesse breast,
Deferre no time ;
That so thy favours granting my request,
They and my minde may chime,
And mend my ryme.（16-30）

この類比は，もちろん，詩の後半部でも継続されるのだが，[8] 注意したいのは，最終連で神の恵みによってこころの活力と音楽（讃歌）の回復を祈るとき，こころの平安を暗示するかのように，韻律上の工夫が施されている点である。すなわち，第 5 連目まで，どの連も最終行の脚韻が上 4 行のそれと異なっているのに，最終連だけは（記号化すると ababb と）見事に韻を踏んで終わっている。つまり，この詩で語られている「こころの発する不調和な声＝音楽」[9] を，まさにこの詩自体が体現していたと言える。テーマの上でも，比喩表現の上でも，実は “Sion” とよく似た詩である。“Sion” の “musick …” (24) がその詩自体，少なくとも詩一般に言及しているだろうことを改めて確認したい。

“Sion” と先に検討した “The Altar” には比喩表現において一つの共通項がある。すなわち，人間（語り手）のこころを神殿あるいは祭壇という，ある種の（キリスト教に関係した）建造物に擬する点である。Stanley Fish は，カテキズムによる読者教化の方途として Herbert が用いた比喩用法の一つに「教会堂建立の比喩表現（“temple building metaphor”）」（以下「教会堂の比喩」と略）があることを指摘した（*The Living Temple* 54-89）。この比喩群は，また，Fish に先立ち，Rosemond Tuve が指摘した「タバナクルの象徴表現（“symbolism of tarbernacle”）」（141）[10]（以下「タバナクルの象徴」と略）とも部分的に逢着する。「タバナクル」は「教会堂」の

タイポロジカルな相似形にほかならない。いずれにせよ，私たちがここで検討した二つの詩は，ともに，Fish あるいは Tuve が論及した，これらの比喩体系の範疇に入ると考えることもできる。重要なのは,「教会堂の比喩」も「タバナクルの象徴」も，先に触れた,「人間のこころ＝神の宮」という聖書的アナロジーを基本に据える点で一つに括れるということである。私たちがとりあげた二つの詩でも，語り手のこころを表象する比喩は，いずれも「神を宿す（何らかの）場所」に還元される。その点においてこれらの比喩体系に包摂されると考えてよい。ただ，一点，私たちの議論に引きつけて言うならば，その「神を宿す場所」として，当の詩それ自体に自己言及していること，それがこれらの詩の最大の特徴であることを併せて（再）確認せねばならない。

これらと同質の特徴を持つテクストがさらに幾編か存在すると思われる。[11] これらの詩群に通底する自己言及の構造とテーマ（＝神への讃歌）の背景に，当時流行した「永遠化のトポス」の影響を看取したとしても，決して行き過ぎではないであろう。Herbert のこうした詩は,「永遠化のトポス」の，ある意味で，変種形と言ってよいかもしれない。

最後にもう一編,「詩＝（宗教的）建造物」という類比こそ見られないものの，自己言及の構造を備え，このトポスを明らかに意識していると考えられるテクストに触れ，傍証としたい。“A Wreath” という短詩である。

A wreathed garland of deserved praise,
Of praise deserved, unto thee I give,
I give to thee, who knowest all my wayes,
My crooked winding wayes, wherein I live,
Wherein I die, not live : for life is straight,

Straight as a line, and ever tends to thee,
To thee, who art more farre above deceit,
Then deceit seems above simplicitie.
Give me simplicitie, that I may live,
So live and like, that I may know, thy wayes,
Know them and practise them : then shall I give
For this poore wreath, give thee a crown of praise.

神に対する讃美を「花輪」として捧げたい，という語り手の思いが綴られた詩である。メタ的な詩論になっており，その内容に関しては後に改めて触れることになるが，ここでは，詩の各行の出だしが前行の結語（句）をリピートするかたちを採ることによって, そして, 最終行の自己言及によって（“this poore weath”［12］），この詩自体がまごうかたなき「讃美の花輪」そのものを体現していることに注意したい 。この作家は，確かに,「永遠化のトポス」を知悉していたに相違ない。

III

ここまで検討してきた *The Temple* における自己言及的な詩（の幾つか）と「永遠化のトポス」とのつながりは，前章の最後に触れた “A Wreath” を含め，“Jordan”（I）および（II）など，詩人自身の詩作の述懐というかたちによって直接「詩」のありようを問うたテクスト群を調べることで，さらに明らかになると思われる。ただ，章を改めるに当って，まず確認しておきたい点がある。それは，前章で扱った詩群が,「永遠化のトポス」と同じように,「詩＝（一種の）記念碑」の定式を充たすのは，語る主体が，詩人自身というよりも，いわば（詩人に内在する）神である時（少なくと

もその助力を得た時）だ，ということである。“The Altar” にあって，詩人（のこころ）が「黙したとしても讃美を止めない」(14) のは, そこに「いけにえ（“Sacrifice”）」として捧げられた神が「語らせてくれる」からにほかならない（15-16）。また，“Sion” にあって，苦悶の果ての呻き声が「神への讃歌（“musick for a King”）」に変ずるのは，神自らが語り手のこころを己が神殿と定め，やはり「歌わしめる」からである（10-18）。これらの詩は,「詩＝（詩を捧げる相手の名声を永遠化する）記念碑」という点では,「永遠化のトポス」と何ら変わらない。しかし，語り手が発するのはせいぜい苦吟の言葉であり，場合によっては黙さざるを得ない。いわば，これらの詩はパラドクスによって「永遠化のトポス」たり得ているのである。場合によっては，こうしたパラドクスの中に，従来のこのトポスに対する批判または諷刺を読み取ることすら可能かもしれない。本章では，宗教詩人としての Herbert が,「永遠化のトポス」を意識しながら，それに対しどのようなスタンスをとることになったのかを，主に彼の詩論を映す幾つかのテクストに言及しながら考えてみることにする。このトポスは，繰り返しになるが，当の詩自らに言及する。場合によって，（仮に詩人自身は無意識であったにせよ）それは詩そのもののありようへの問いかけにもなる。Herbert の詩作について述懐したテクストを検証してみることは，このトポスに立脚した（前章でみたような）幾つかの詩に込められた彼なりの問題意識を直接示唆してくれる可能性が高いと推測される。また，それは「永遠化のトポス」の流行の背後で生じている社会・文化的現象の中での宗教（文学）のありように対する（この詩人の）スタンスを暗示してくれるようにも思える。

The Temple の中に “Jordan” と題された二つの詩がある。ともに自己言及的なテクストで，詩のありようを意識的に論じる内容になっている。まず

は，これらの詩を中心に Herbert の詩作に対するスタンスを検討しておきたい。はじめに，“Jordan”（I）である。[12] この詩では，明らかに同時代の世俗詩が批判されていることが分かる。恋愛詩や牧歌を暗示する語句が多用され，[13] それらがどれも否定的な文脈で用いられている。語り手の結論は明快で，それは以下のように，この詩の最終連に凝縮されている。

> Shepherds are honest people ; let them sing :
> Riddle who list, for me, and pull for Prime :
> I envie no mans nightingale or spring ;
> Nor let them punish me with losse of rime,
> Who plainly say, My God, My King.（11-15）

問題は，世俗詩が批判される理由である。批判の対象になっているのは，一口に言うと，世俗詩に特徴的な華美な技巧（e.g. “false hair” [1], “painted chair” [5], “enchanted groves” [6], etc.）なのだが，真に問題とされているのは，そうした技巧自体よりも，どうやらその背後に隠れる詩作に際する詩人自身の何らかのスタンスのようである。[14]

この点を少し掘り下げて考えてみるために，同じタイトルが付せられたもう一つの詩，“Jordan”（II）を検証したい。

> …
> That I sought out quaint words and trim invention ;
> My thoughts began to burnish, sprout, and swell,
> Curling with metaphors a plain intention,
> Decking the sense, as if it were to sell.（3-6）

この詩でもまた，当時の世俗詩のありようが批判的に仄めかされていることが分かる。語り手は神へ捧げる詩をものするという誉れのゆえに肩に力が入り過ぎ，結果，平明な意図（“plain intention”［5］）で書かれるべきものを，過剰な比喩で潤色してしまった，と回顧する。“Curling with metaphor …”（5）が，おそらく，当時の恋愛詩を捩っているだろうことにも注意したい。この後に続く第 2 連も内容はほぼ同じである。問題は最終第 3 連。

> As flames do work and winde, when they ascend,
> So did I weave my self into the sense.
> But while I bustled, I might heare a friend
> Whisper, *How wide is all this long pretence!*
> *There is in love a sweetnesse readie penn' d ;*
> *Copie out onely that, and save expense.*（13-18）

ここで，語り手の迷いの本質が，おそらく浮き彫りにされている。彼が問題にしているのは，単に過度の技巧なのではない。そうではなく，「詩の中に織り込んでしまった〈自我〉」（16）なのである。遡って，第 1 連における（彼の描く宗教詩が）「まるで売り物のように（“as if it were to sell”［6］）」華美な代物になってしまった，という述懐にも注意したい。これは，つまり，当時，抒情詩の本格的出版とともに台頭し始めた職業詩人たち（の作品）の謂であろう。先の “Jordan”（I）の，とりわけ以下の箇所に D.M. Hill が看取した「職業詩人たちへの批判」（350）も重要である。

> Shepherds are honest people ; let them sing :
> Riddle who list, for me, and pull for Prime :

I envie no mans nightingale or spring ;[15]
…　　（11-13）

これらを踏まえ，“Jordan”（II）で摘発された「（詩に織り込まれた）自我」を再考すると，ここで示唆されている事態の本質は，つまり，（Hill が “Jordan”（I）で指摘した［350］）職業詩人特有の,「詩作における “ambition” 介入」の問題（と同じ）ではなかったか，と思われる。それは，世俗詩人にとっては当たり前のことであっても，神を相手とする宗教詩人にとってはデリケートな（場合によっては致命的ともいえる）「罪」に通じる可能性がある。[16]

これらのテクストにおいて断罪されていると考えられる（職業詩人の）“ambition”，つまり「名声欲」は，とりわけ彼らの愛用した「永遠化のトポス」にのみ固有のものではない。従って，Herbert が当時の世俗詩を批判しているとしても，その矛先が「永遠化のトポス」のみに向けられているとは言えない。ただしかし，標的は，とりわけ「出版」という新しいメディアを利用した職業詩人たちであったことは確かなように思える。そして，その職業詩人たちが頻用したのが，ほかならぬ「永遠化のトポス」であり，このトポスが名声願望（の永遠化）の記号であることを忘れるべきではない。

Since, spite of him, I'll live in this poor rhyme,
While he insults o'er dull and speechless tribes :
…　　（William Shakespeare, *Sonnets*, 107, 11-12）（下線は筆者）

冒頭の章で既に指摘した通り，このトポスは詩を捧げる相手の名声の永続

をテーマとしたものだが，それは，同時に，それを可能にする「詩」という芸術の価値への自負であり，何より，それを制作する「作者」（あるいはその創造力）への自負でもあったのである。上に引いた Shakespeare からの例は，それが（はからずも？）前景化してしまったケースである。こうしたトポスをあえて模したと思われる Herbert の “The Altar” や “Sion” はじめ幾つかの自己言及的な詩は，こうした（職業詩人たちの手になる）世俗的それの，あるいはアンチ・テーゼのような意味あいがあったのかもしれない。

ここまでの検討で，少なくとも Herbert が，当時の，特に職業詩人に顕著な「名声欲」に，ある種の問題を感じていることが理解された。しかし，この「名声欲は」，先に触れたように，かなりデリケートで深い，ある意味でキリスト教信仰の本質にも関わるような問題をはらんでいるように思える。先に検討した “The Altar” や “Sion” などに特徴的なパラドクスの根拠を考える上で，この点についても少し触れておかねばならないであろう。問題は，再び「詩の中に織り込んでしまった〈自我〉」（“Jordan” (II) [13]）である。二つの “Jordan” という詩を読んでみて分かることだが，語り手は決して信仰の道から逸れたことを企てている訳ではない。むしろ，全霊をかけて神讃美という務めを果たそうとしている。しかし，彼が問題としたのは，そうした一見真摯な行為の中に，おそらくは無意識のうちに入り込んでしまう「自己愛」のようなものだったと考えられる。Herbert に見られるこうした鋭敏な罪意識をつとに指摘していたのが Rosemond Tuve である。「自己献身を装った自己愛（“self-love masquerading as self-dedication”）」，彼女は Herbert の看取した罪をそう表現している（188）。[17] その性質の理解の一助として，“The Holdfast” という詩を引いてみたい。

Then will I trust, said I, in him alone.
Nay, ev'n to trust in him, was also his :
We must confesse that nothing is our own.
Then I confesse that he my succour is :

But to have nought is ours, not to confesse
That we have nought. …（5-10）

信仰のありようをめぐる対話形式をとった詩である。語り手は，対話の中で，本来，神への信仰すら人間自らの力によるものではないこと，また，人間自らが内に持ち得るものなど何もないのであって，「〈何ももたない〉と告白すること」すら，本来，人間のできることではない，と教えられる。ここで扱われている内容は，おそらくは（少なくとも聖アウグスティヌスまで遡って考えねばならない）「信仰」にまつわる極めてデリケートで重要な問題と思われる。[18] この問題が Herbert に深い苦悩を与えたのは間違いない。“The Holdfast” と併せ，もう一つ，“Frailtie” と題された詩に触れておきたい。この世の「名誉」や「富」の追求の虚しさを知りつつ，なおそれを捨てきれない語り手が，神の救いを求めるのだが，その最後の祈りの部分に注意したい。

O brook not this, lest if what even now
My foot did tread,
Affront those joyes, wherewith thou didst endow
And long since wed
My poore soul, ev'n sick of love :

It may a Babel prove
Commodious to conquer heav'n and thee
Planted in me.（17-24）

語り手は，この世の虚栄に固執するおのれのこころのありようを「バベルの塔」に擬している。これは，地上的な喜びに堕すおのれの弱さ自体を指したものではない。この譬えは，そうした弱さが，いつか天や神を自らの手で掴み取れる（23-24），という「傲慢」に通底することの謂ではないか。まさにこれは，Tuve が指摘した，あの変形した「自己愛」なのに違いない。「信仰さえ与えられたもの」という "The Holdfast" に見られた思想は，とりもなおさず，この種の「驕り」あるいは「自己愛」への警鐘にほかならない。その「驕り」や「自己愛」は（パウロが指摘するような）篤い信仰心の裏側に隠れた陥穽のようなものかもしれない。それがゆえに気づきにくく，対処の仕方が厄介なのだと言える。

"Jordan"（I）や（II）など，特に Herbert の詩論とも言えるテクストで問題視されている（職業詩人たちに特徴的な）「名声欲」は，宗教作家としての彼にとっては，このような内実を伴うものであったと思われる。翻って，前章で扱った「永遠化のトポス」を模しているように思えるテクスト群が，基本的に，語り手自らがむしろ「語らせられる」時，あるいは「黙した」時，真に（神の）名声への讃歌となる，というパラドクスによって成り立っているのは，語り手自ら（の言葉）に潜む，この厄介な「名声願望」ゆえのことだったに違いない。

IV

Herbert は，確かに「永遠化のトポス」を利用した。「詩」という芸術

のもつ（永遠化という）力に，彼もまた魅せられた者の一人だったに違いない。しかし，彼は，その「永遠化」の主体性（あるいは詩の制作自体に関わる主体性）を，ある意味で，おのれ自身から剥ぎ取ってしまったのである。彼の詩は，彼のものであって，ある意味で彼のものではない。そのようなパラドクスによって，彼の詩は成り立っている。かつて，（先に引用した）Fish が 17 世紀の主に宗教芸術の中に “self-consuming artifacts” を看取した。私たちが扱ったテクストは，観点は異なるが，そうした範疇に入ると考えることもできる。そのような芸術がありうるのか，という問いかけに対しては，答えるすべはない。芸術と「自己表出」が不可分である以上，論理的な不整合は消えない。根源的には「信仰」の問題，としか言いようがないであろう。おそらく，こうした詩論において，詩人はある種の「代弁者」あるいは「模倣者」のようなかたちで，かろうじてその存在が認知されるのだろう，と推察するほかない。

> But while I bustled, I might heare a friend
> Whisper, *How wide is all this long pretence!*
> *There is in love a sweetnesse readie penn'd ;*
> *Copie out onely that, and save expense*.
>
> （“Jordan” (II), 15-18）（下線は筆者）

しかし，そのようなかたちであれ，詩という芸術のもつ（永遠化という）意義を信じ得たからこそ，ここで取り扱ったような詩が生まれたのである。この詩人は「永遠化のトポス」にはらむ「驕り」という罪を充分知っていた。彼の詩が同じ時代に流行したこのトポスに対するパロディだと評することには躊躇いがあるが，そこに潜む危険性には，間違いなく鋭敏に反応

していた。

彼のその反応は，大きく言えば，また，時代の急激な「世俗化」や「近代化」に対するものでもあった，と言える。「永遠化のトポス」の流行と，上で触れた “self-consuming artifacts”（の流行）は，実は，この「世俗化」や「近代化」を同根として，文学というジャンルに現れた表裏の記号とみることもできる。このトポスや詩論を反映する詩群の中で Herbert が感知している危惧は，直接的には，なるほど同時代の世俗詩（人）に対して向けられたものではあるが，それは，ぼんやりと，しかし確かに，やがて訪れる宗教芸術の衰退を予表するものでもあったに違いない。これらのテクストは，この詩人が生きた時代の前後に生じた新旧文化の「せめぎあい」の，まさに表象なのであろう。

私たちが最初に扱った “The Altar” は，*The Church* の冒頭に配されていた。教会堂の物理的構造との関係（Walker 289-95）などは別にして，「神への永遠の讃歌」という願いを込めたこの詩がまず最初に置かれていることの意味は深いであろう。それは，むろん，詩集全体におよぶ理念を表すに違いない。この詩人にとって，神によって「語らせられる」というありようが，少なくとも理論上は，何よりもかけがえのない姿勢だったのである。

註

1　テクストは，Maurice Evans の版による。以下，Daniel, Drayton について引用されるテクストもすべて同版による。Evans の拠った各作家のテクストの原版は，Daniel が 1594 年，Spenser が 1595 年の各版で，Drayton のものは数種の版を Evans が独自に再編したものである。よって，Drayton のテクストを引用する場合に限り，原版の出版年を併記することとする（ソネット番号は Evans に準拠）。

また，Shakespeare のテクストに関しては，Stephen Booth，Herbert のテクストは，F. F. Hutchinson の版による。

2　例えば, Samuel Daniel（*Delia*）, Michael Drayton（*Ideas Mirrour*）, Edmund Spenser（*Amoretti*）など，主に職業詩人に多く見られる。（e.g. *Delia*, nos. 1, 2, 4, 37, 38, 39, 40, 50, 53, 54, etc. ; *Ideas Mirrour*, 3［1594］, 6［1619］, 35［1594］, 42［1594］, 44［1594］, 45［1599］, 47［1605］, 49［1599］, 54［1594］, etc. ; *Amoretti*, 27, 29, 69, 75, 80, 82, 85, etc.）

3　このトポスの背景にある「名声願望」の醸成と活字印刷（の出現）との親和性は言うまでもないが, 例えば, Marshall McLuhan は, 印刷文化によって「（刻印された）文字の不滅性」（201-06）あるいは「知的財産や名声の囲い込み」（130-33）の感覚が，また，Walter J. Ong は「言葉の所有」（131-33）感覚が産み出されたと指摘している。この点に関しては，かつて多少論じたことがあり（畠山 ,「初期近代」5-9），小論では論及を避けるが，以下に主な参照文献を挙げる。

活字印刷と作者（概念）の醸成については Mark Rose（esp. 1-48）, Martha Woodmansee（35-56）, John Brewer（241-49）など。また，その中でも,「作者という形象」の出自を出版業者の商業的利権や国家の検閲などとの関係から文化表象的に捉える立場として，Michel Foucault（141-60）, Roger Chartier（*The Order* 25-59）など。また，イギリスに特化し，とりわけ 1590 年代の抒情詩出版と作者概念の問題について論じたものとしては，A. F. Marotti（209-90）, Wendy Wall（23-109）など。

こうした問題は，もちろん，出版物の受容のありかたとも関係する。出版とマーケットの関係は，H.S. Bennett（esp. II-III）, Graham Polland（102-53）など。活字印刷と読書（のハビトゥス）との関係は，Chartier（"The Practical Impact" 124-27）, Karin Littau（13-22）など。また，書物に関するプリント（技術）前史については Andrew Pettegree（1-20）などを参照。

4　Herbert の詩論についてはかつて別の視点から考察を加えたことがある（畠山「技巧の不要性」）。また，本論で扱う Herbert の一部のテクストと「永遠化のトポス」の関係，およびこの詩人の信仰観との関係についても別の論考で若干触れている（畠山「初期近代」）。本論は，このトポス（との関係）の問題を Herbert に特化し，より掘り下げて検証したものである。

5　このテクストの根底には，旧約律法と新約の教えの対比があると考えられる。前者は石に刻まれ（Exod. 31 : 18），後者は（キリストの愛として）人間のこころに刻まれた（II Cor. 3 : 3）とされる。

6　ここで言及される祭壇には，（J.D. Walker が指摘する［289-95］）かつての "Hebraic ritual" における「生贄の儀式が執り行われた場所」の暗示があると考えられるが，同時に，受肉したキリストを宿す場所という新約的イメージが重層していると考えねばならない。

7　"Vertue"（11-12）, "The Temper"（I）（23-24）, "Deniall"（後述）, etc. また，詩の視覚的かたちがヒバリの姿を具現した "Easter-wings" も，この詩自体がひばりの（キリスト讃美の）鳴き声をも表象している［7-9］。言うまでもないが，これらの詩はすべて自己言及的であることにも注意したい。

8　語り手のこころはさらに音楽を奏でる「楽器」に譬えられていることにも注意したい（e.g. “bow” [6], “untun’d” [22], “tune” [26]）。

9　“Untun’d, unstrung” (22), etc.

10　この範疇に入る比喩は，「キリストを宿すもの」という観点からマリアなども含んでいる。とりわけ「人間のこころ」が（タバナクルとして）表象されるテクスト例は，“Sepulchre”, “The Temper” (I), “The Temper” (II), “The Altar” などで，必ずしも多くはない（142-42, 182-83）。

また，C. A. Patrides が指摘する “architectual imagery”（14-15）もこれらの比喩体系と部分的に合流すると考えられる。

11　これら二つのテクストと同じカテゴリーに入るものとして，ほかに “The Familie”, “The Windows”, “The Church-floore” などが挙げられるかもしれない。

12　先述の通り（註4），この詩に反映される Herbert の詩論については以前論じたことがある（畠山，「技巧の不要性」esp. 18-24）。ここでは概要のみ簡単に触れる。

“Jordan” (I)（II）を中心とした詩論に関し，結論自体においては本論も変わるところはない。本論では，「永遠化のトポス」と Herbert の関連を掘り下げて考察した結果，必然的にこの詩人の詩論に論及せざるを得ず，ある意味で（前回とは）別のアングルから（彼の詩論を）傍証するかたちになったものである。

13　e.g. “false hair” (1), “winding stair” (3), “painted chair” (5), “enchanted groves” (6), “sudden arbours” (7), “purling streams” (8), etc.

14　この詩で批判されている対象を世俗詩における「過度の技巧」とみる伝統的立場（e.g. H. J. C. Grierson, Joan Bennett, J. H. Summers, etc.）に対し，Rosemond Tuve (185-87), L. L. Martz (260) などがそれぞれの立場で反論している（詳しくは，畠山，「技巧の不要性」20-24）。

15　この箇所の “pull for Prime” (12) は，「（当時流行した）“primero” というカード・ゲームで勝とうとすること」の意である。直前の “Riddle who list …”（という表現）と併せ，表面的には「技巧を凝らし，真実を率直に歌わぬ者」を指していると考えられる。

16　畠山，「技巧の不要性」esp. 24-34.（“Jordan” (I) および (II) で共通に用いられる “winding”［あるいは “wind”］に関する分析を中心として，この問題を考察したことがある。ちなみに，この言葉は先に触れた “A Wreath” でも用いられており［4］，Herbert の「罪」観を表象していると考えられる［cf. Hill 350］。）

17　この（自我の）問題に関しては，Frances Cruickshank もこれと類似した見解を述べている（82）。

18　こうした「信仰観」の問題については，以下に（本論で）扱う “Frailtie” の解釈も含め，かつて別のテーマとの関わりから，その一端に論及したことがある（畠山，「技巧の不要性」24-28 ;「 “Stone Imagery”」51-57）。この点については，また，Tuve の “Jordan” poems に関する分析（182-203）が極めて参考になる。

また，Herbert の宗教上の「愛」の捉え方については，Helen Vendler が “A

True Hymne" をモデルに，上記 Tuve 論に近い考え方を示唆している（15）。この詩もそのタイトルが暗示する通り，やはりメタ的な詩論になっており，詩自体の（神への讃歌としての）不備を神が補充するという祈りあるいは信仰（告白）を内容とする。"Sion" や（特に）"Deniall" と内容，構成がよく似たテクストである。

Works Cited

Bennett, H.S. *English Books and Readers*. 3vols. Cambridge : Cambridge UP, 1989.

Booth, Stephen, ed. *Shakespeare's Sonnets*. New Haven and London : Yale UP, 1977.

Brewer, John. "Authors, Publishers and the Making of Literary Culture." *The Book History Reader.* Eds. David Finkelman and Alistair McCleery. London and New York : Routledge, 2002. 241-49.

Chartier, Roger. *The Order of Books : Readers, Authors, and Libraries in Europe between the Fourteenth and Eighteenth Centuries*. Trans. Lydia G. Cochrane. Cambridge : Polity, 1994.（『書物の秩序』，長谷川輝男訳，東京： 文化科学高等研究院出版局，1993.）

————. "The Pratctical Impact of Writing." *Passions of the Renaissance*. Ed. Roger Chartier. Trans. Arthur Goldhammer. A History of Private Life 3. Cambridge, Mass : Harvard UP, 1999. 111-60.

Cruickshank, Frances. *Verse and Poetics in George Herbert and John Donne*. Surrey : Ashgate, 2010.

Curtius, Ernst Robert. *European Literature and Latin Middle Ages.* Trans. Willard R. Trask. Princeton : Princeton UP, 1973.（『ヨーロッパ文学とラテン中世』，南大路振一他訳，東京： みすず書房，1971.）

Evans, Maurice, ed. *Elizabethan Sonnets*. London : Dent, 1977.

Fish, Stanley. *Self-Consuming Artifacts : The Experience of Seventeenth-Century Literature.* Berkeley, Los Angeles, London : U of California P, 1974.

————. *The Living Temple : George Herbert and Catechizing*. Berkeley : U of California P, 1978.

Foucault, Michel. "What Is an Author?" *Textual Strategies : Perspectives in Post-Structuralist Criticism*. Ed. Josué V. Harari. London : Methuen, 1980. 141-60.（『作者とは何か？』，清水徹・豊崎光一訳，東京： 哲学書房，1990.）

畠山　悦郎.「技巧の不要性の背景 —— 'Jordan' Poems をめぐる George Herbert の詩作理念」，『東北』14（1979）: 18-38.

————.「*The Temple* における "Stone" Imagery」，『東北学院大学論集（英語英文学）』75（1984）: 39-58.

————.「初期近代イギリスにおける「永遠化のトポス」に関する一考察」，『神話・宗教と文学・芸能に関する比較文化史的研究』（「高等教育研究改革推進」助成報告）（2004）: 5-17.

Hill, D.M. "Allusion and Meaning in Herbert's 'Jordan I'." *Neophilologus* 56 (1972) : 344–52.

Hutchinson, F.E., ed. *The Works of George Herbert*. Oxford : Clarendon P, 1972.

Littau, Karin. *Theories of Reading : Books, Bodies and Bibliomania*. 2006. Cambridge : Polity, 2008.

Marotti, Arthur F. *Manuscript, Print, and the English Renaissance Lyric*. Ithaca : Cornell UP, 1995.

Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation : A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven : Yale UP, 1974.

McLuhan, Marshall. *The Gutenberg Galaxy : The Making of Typographic Man*. 1962. Toronto : U of Toronto P, 1988. (『グーテンベルクの銀河系 —— 活字人間の誕生』, 森常治訳, 東京 : みすず書房, 1986.)

Ong, Walter J. *Orality and Literacy : The Technologizing of the Word.* 1982. London : Routledge, 1991. (『声の文化と文字の文化』, 桜井直文他訳, 東京 : 藤原書店, 1991.)

Patrides, C.A., ed. *The English Poems of George Herbert*. London : J.M. Dent & Sons, 1974.

Pettegree, Andrew. *The Book in the Renaissance*. New Haven and London : Yale UP, 2010.

Pollard, Graham. "The English Market for Printed Books : The Sandars Lectures, 1959." *Book Publishing : Critical Concepts in Media and Cultural Studies*. Ed. John Feather. 4 vols. London and New York : Routledge, 2011.

Rose, Mark. *Authors and Owners : The Invention of Copyright*. Cambridge, Mass. : Harvard UP, 1994.

Taylor, Mark. *The Soul in Paraphrase : George Herbert's Poetics*. The Hague and Paris : Mouton, 1974.

Tuve, Rosemond. *A Reading of George Herbert*. Chicago : U of Chicago P, 1969.

Vendler, Helen. *Invisible Listeners : Lyric Intimacy in Herbert, Whitman, and Ashley*. Princeton : Princeton UP, 2005.

Walker, John David. "The Architectonics of George Herbert's The Temple." *ELH* 29 (1962) : 289–305.

Wall, Wendy. *The Imprint of Gender : Authorship and Publication in the English Renaissance*. Ithaca : Cornell UP, 1993.

Woodmansee, Martha. *The Author, Art, and the Market : Reading the History of Aesthetics*. New York : Columbia UP, 1994.